佐木隆三

矯正労働者の明日

きょうせい

河出書房新社

佐木隆三

矯正労働者の明日

河出書房新社

矯正労働者の明日

一九九三年 二月一五日 初版印刷
一九九三年 二月二五日 初版発行

著者 佐木隆三
装幀者 秋山法子
発行者 清水 勝
発行所 株式会社 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話 三四〇四―一二〇一（営業）
三四〇四―八六一一（編集）
振替口座 （東京）〇―一〇八〇二
印刷 大日本印刷株式会社
製本 小高製本工業株式会社
©1993 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-00825-9

定価1800円

矯正労働者の明日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

矯正労働者の明日◉目次

第九工場　5
反省ノート　51
回復の日々　87
沈みゆく町　111
二度目の化粧　135
満罰解除　159
タンカバイ　179
野辺の煙　197
［起訴状］　215

第九工場

午後からは動力ミシンのモーター音もやんで、第九工場の七十人で総がかりの糸切り作業だった。糸切り工の定員は六人であり、ミシン工が縫いあげた上下続き服の裏や表の残し糸を小バサミで切り取るが、こう生産が急ピッチだと溜ってしまう。そこで出荷日に、全員が臨時に糸切りをするのである。

一週間の労働の総仕上げだから、無駄口をたたく者もいない。壁に掲示された棒グラフで、今月の生産が新記録になりそうなことを皆が知っている。したがって動力ミシンの騒音がやんで、ピーンと緊張しているのは、アイロン台の横に居るぼくによく分る。蒸気にかすんではいても、連中のキビキビした動きがはっきり見え、うっかりすると涙ぐんでしまいそうだ。

「おねがいします、棟梁」

いつもながら能率の良い曾我部が、仕上げたぶんをひとかかえ持って、ぼくのところへ来る。

「ごくろうさん」

どさっと検査台に置いたのを、いちおう手に取って見る。衿から袖口、ファスナー部分にボタンかがりまで、細かい注意がゆきとどいて、何の問題もない。

「さすが曾我部じゃね、ケチのつけようのなか」

「いやぁ」
「ほいじゃ、あっちへ」
検査パスで指の輪を作ったら、メガネをずり上げていた曾我部が、不服そうな顔をした。
「よかですと？」
「パスち言うたろうがい」
「バッテン見たのは、いちばん上だけですバイ」
「それがどげんした、文句があるか！」
ぼくは曾我部を、ぐっと睨みつけた。彼が持って来たのは、割当ての二十枚である。数えなくても、顔を見れば分る。糸切りのとき、縫製の不完全が発見されれば、ペケとして申し出ることになっている。したがって曾我部自身により、すでに検査済みと思っていい。
「わしはダテに、赤線を巻いちょらんけぇ」
「……」
「あんたの仕事は、どれか一枚をざっと見せてもろたら、それで充分タイ」
「いやぁ」
「文句のあっとね？」
もういちど睨んだが、頬のあたりがゆるんでしまう。曾我部にしたところで、さっきの不服顔は、心からのものではない。わずかなあいだながら、互いに相手の目を見つめて微笑し合った。
「ありがとうございました」
二十六歳の小柄な曾我部が、背筋をピンと伸ばして、お辞儀をする。検査台の二十枚は、待ちか

まえていたアイロン工によって、すぐに運ばれた。さっとアイロンがけして、メーカー表とともにビニール袋に入れれば、それが最終製品になるのだ。
「ごくろうさん。……ゆたっとしておくがよか」
「そうはいきまっせん」
汗をかいている曾我部の小鼻が、ピクッとふくらんだ。
「坂田のとっつぁんが疲れとるごたるけん、加勢させてもらいます」
「そうな」
ぼくは頷いた。こういうときは、ことさら感想をつけ加えないほうがいい。言葉通り坂田を手伝うかどうかを、さりげなく観察しておけばいいのだ。
曾我部が持場に戻ると、入れかわりに篠塚がやって来て、
「おねがいします」
と、シシシシと歯を鳴らした。
「ごくろうさん」
これも二十枚あるのを、素早く指で確かめた。関東から来た篠塚は、すでに四十を過ぎて、ひどく精気のない顔をしているけれども、仕事は速いのである。しかし、粗雑なのが難点だから、ぼくは十枚目あたりを抜き取って見た。
「篠塚さん」
「ん？」
「すまんけど、ここのところ、残っとるごたるね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ポケットを縫いつけた糸が、だらりと五センチも垂れている。ほかの部分は問題ないけれども、次のぶんを確めると、やはり糸切りがなされていない。

「こっちも、忘れとるバイ」

「ほほう……」

細い目をしばたたいて、あいかわらず、シシシシと歯を鳴らす。二週間前に奥歯を抜いたのが、いまだ気になるらしい。

「切らなきゃならんのか」

「困るですなぁ、篠塚さん。何かの拍子にこいつを引っぱると、ぞろぞろっと縫い目がほどけて、パクッと口を開けるですよ」

「しかし棟梁、裏側だもんねぇ」

「そげんこついうて、覚えはなかですか」

ぼくは笑顔を忘れずに、年上の篠塚に応対した。第九工場の全員が、脇目もふらずに作業をしているかに見えて、そのじつ様子をうかがっているのである。

「服でも下着でも靴下でもよかぁ。余分な糸が目につくと、何気なく引っ張ってしまうでしょうがい？」

「ふーん」

「そうすると必ず、ぞろぞろっとほどける。切ろうとピッと力を入れて引っ張ってもダメ。あれはやっぱし、短気を起さんごとして、ハサミかツメキリでパチーンと切るのが正解ですけんね」

「だけど……」

「ポケットの裏側というて、油断しちゃいかん。さっきも言うたごと、何気なく引っ張るのが人情ですバイ。パクッと口を開けても、どうせ作業服じゃけん、たいした物は入っとらんかもしれんが、ポケットはポケットやけんね。製品として社会に送り出すからにゃ、恥ずかしゅうない仕上げにしまっしょや」

「それは分るけど」

痩身で百七十二センチぐらい、ぼくとほぼ同じ背丈の篠塚は、解しかねる表情でズボンを撫でるが、これにはポケットがついていない。

「糸切りをそこまで、しなきゃならないものかなぁ」

「篠塚さん、ほんなごついうとね、需要家から苦情が来た。そこの糸切りだけは、厳重にやってほしいちゅうわけです」

「……」

「どげん苦情がきたか、教えましょう。ある町工場で、続けて事故が発生した。原因を調べたら、なんと作業衣のポケットの穴ですタイ」

「ん?」

「パクッと口を開けたもんで、作業中につい手がそこへ行って、チンポに触れる。ほいで仕事のことも忘れてからに、せんずりをかいたちゅうです。そいつが起重機の運転工じゃけん、下で働きよる者は、ドスーンと重量物が落ちて来て、こりゃたまらん」

「シシシシ……」

とうとう笑いだして、しかたないとばかりに持って来た製品をかかえて、篠塚は引返した。

「おねがいします」
次々に検査台に、積上げられる。二時半の休息時間が近づいてきたので、その前に区切りをつけたがっているのだ。ぼくもぐずぐずしてはいられず、適当におだてたり注意を与えたりしながら、検査を進めていった。
ところが休息のベルが鳴る少し前に、「おねがいします」とも言わず、どさっと置いて行ったのが居る。
「あの野郎、下田というたな」
たまたま検査を受けていた柳瀬が、かん高い声をあげた。
「新入りのくせして、ふてえ面しやがる」
「ばか、声が大きい」
「バッテン、棟梁……」
「あいつは、変り者じゃけん、放っておくがよかぁ」
ぼくは柳瀬を制して、下田の後姿を見た。三十代の半ばでがっしりした体つきだが、顔だけが妙に長く、間延びして見える。つい五日ほど前第九工場に配属され、見習い中なのである。初めのうち間延びした顔から、すこし脳の遅れた男かと思い、流れ作業についていけないのを、むしろ同情していた。ところがそうではなく、他所から回されて来たのであり、意識してふてぶてしい態度をとっている。新入りは如才なくペコペコするか、ふてぶてしく構えるか、はっきり分れるものなのだ。立場上ぼくとしては、気にしながらも無視してきた。
「はい、ごくろうさん」

「ありがとうございました」
柳瀬が敬礼の仕種で、ニッコリ笑った。彼もまた、仕事が正確であり、なによりも生一本な性格なのが、ぼくは気に入っている。近いうち二級に進むはずだから、補工に任命してもらうよう具申するつもりだ。
ぼくの心は、弾んでいた。作業指導員に任命されて、この十一月で満一年になる。まったく自分でも信じられないぐらい、順調なのだった。こんな場所だから、小さな事故はやむをえない。しかし、幸いなことに大事には至らず、第九工場の業績はどんどん上って、すでに所長表彰を二度受けた。こんど月産新記録を樹立すれば、福岡矯正管区の管区長表彰も夢ではない。たかが二十九歳の若僧につとまるかと、冷ややかな目を向けていた連中も、今ではぼくの言うことに耳を傾けてくれる。自分でいうのもおこがましいが、第九工場七十人の労働者を統率する作業指導員になってから、誠心誠意かげひなたなく、ひたすらつとめてきたことを分ってもらえたからだ。もし座右銘を問われれば、ぼくはためらいなく、〈忍〉の一字を挙げるだろう。
だが、弾む心は、一瞬にして凍りついた。下田が持って来たぶんは、糸切りが完全でない。単なる手落ちではなく、故意にやっておらず、下のほうのものを抜き取ってみると、まったく手つかずの素通しだ。
「おねがいします」
次の朴が検査を促している。
「済まんな、待ってやんない」
ぼくはひらりと検査台を越えると、不良品の二十枚を脇にかかえた。

下田は流れ作業の、ほぼ中間に居る。衿付けから、ファスナー付けへと進むところで、員数合せをすればいい。でくのぼうでも出来る仕事だが、彼は見習いをいいことに、いつも突っ立っているだけだった。一昨日だったか、相棒の謝名本がたまりかねて注意したところ、逆に言い返したので口論になり、工場が騒然となった。しかし、幸い近くの連中が止めに入ってことなきを得た。ぼくは立場上、ひとこと言うべきと思いながらも、すこし様子を見ることにしたのだ。第九工場には、関東から来た者が少なくない。おのずから九州勢、関西勢に抗して、グループが出来る。その関東勢が、下田をどう思っているのか、見定める必要もあった。

「下田さん」

努めて穏やかに、ぼくは話しかけた。奴の背後の壁にある〈安全第一〉〈沈黙は金なり〉などの標語が、冷静であれと呼びかけているかのようだ。

「あんたの仕事は、うまくいっとらんごたるね」

「……」

「初めてじゃけん、無理もなかバッテン、ここんところはパチーンと、こげなふうに切るようになっちょるタイ」

ぼくは小バサミを手に、糸切りをやってみせた。親指と人差指でUの字を作ったのと、ほぼ同じ大きさのハサミである。まず表側を、そして裏側の糸を切りながら、バカとハサミは使いようとはよく言ったものだと、苦笑してしまった。ひょっとしたら下田は、この簡単なハサミが使いこなせないのかもしれない。

「出来るやろ？」

小バサミを作業台に置いたが、下田は手を出そうともしない。それどころか、さっきからうるさそうに、返事もせずそっぽを向いている。
「下田さん、頼むバイ。環境が変って、気の立っとるのは分るけんどが、この工場は流れ作業じゃもんねぇ」
やむなくぼくは、小バサミを手に二着目も自分でやりはじめた。こうしていなければ、ただの交談に受けとられる。いや交談ならいいが、口論から本格的な喧嘩への兆と思われかねない。動力ミシンが停止して、いつもの騒音がないだけに、嵐の前の静けさに映るのではないか。
「もしあんたが、どげん努力してもうまくいかんごたるなら、わしに言うてやんない」
「……」
「若輩ながら第九工場を、わしが預っちょる。チームワークが、何よりも大切と思うタイ。そやけあんたのことも、考えさせてもらう。遠慮せんで、言うておくれ」
「……」
「お互い辛抱タイ。こげんところで角を突き合せちゃ、何の得にもならん。あんたもきつかろうが、仕事をしてくれんば、皆に迷惑がかかる。……頼むバイ、下田さん」
休息のベルが鳴ったので、ぼくは検査台のほうへ帰った。はたして奴が、どれだけ聞いてくれたか、心もとない限りである。しかし、ぼくとしては高圧的にならぬよう、条理を尽くしたつもりだった。棟梁とも赤線とも呼ばれる、第九工場の責任者になってからは、縫製作業に関するいっさいをとりしきるとともに、個人的な相談やトラブルの仲裁までも引受けてきた。
若輩の身でおこがましいけれども、労働者がかかえる問題は、労働者同士で話合って解決すべき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com